

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<Note> The Relationship between Extra Class Activities and Moral Education, Concerned with Classroom Management and Student Guidance

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松永, 幸子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/479

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



特別活動と道徳授業のつながり

— 学級づくり・生徒指導とも関わって —

The Relationship between Extra Class Activities and Moral Education,
Concerned with Classroom Management and Student Guidance

松 永 幸 子

MATSUNAGA, Sachiko

第1章

1. 特別活動の目標と内容

近年のいじめや少年犯罪など、問題行動に対応するためにも、特別活動を充実させることが求められている。特別活動は、他の教科とは異なり、自然や地域の人々と触れ合う機会を作り出すことも可能であり、児童生徒の内面に働きかける力が大きい。

そこで、ここでは、特別活動の意義や内容、他教科、特に道徳とのつながりについて検討する。その上で、それが生徒指導や学級づくりにどのように生かされうるのかを考察する。

まず、学習指導要領で特別活動の目標を確認したい¹⁾。

①小学校の目標

望ましい集団活動を通じて、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。

②中学校の目標

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

③高等学校の目標

望ましい集団生活を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

以上の中で着目されるのは、「望ましい集団生活」である。児童生徒は、特別活動において多様な体験をし、この体験を通して豊かな人間観、価値観を育み、自己中心的ではなく、他者を思いやり望ましい集団生活を営むことが期待されている。

2. 各活動における目標

次に、各活動における目標はどうなってい

キーワード：特別活動、道徳教育、学級づくり、生徒指導

Key words : special activities, moral education, student guidance, classroom management

るのか、確認したい。

①小学校の活動

小学校の活動には、①学級活動、②児童会活動、③クラブ活動、④学校行事がある。

各活動・行事の目標は以下のようになっている。

ア 学級活動

学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。

イ 児童会活動

児童会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。

ウ クラブ活動

クラブ活動を通して、望ましい人間関係を形成し、個性の伸長を図り、集団の一員として協力してよりよいクラブづくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を育てる。

エ 学校行事

学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的・実践的な態度を育てる。

②中学校の活動

中学校の活動には、①学級活動、②生徒会活動、③学校行事がある。

各目標は以下とされている。

ア 学級活動

学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校における

よりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。

イ 生徒会活動

生徒会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてよりよい学校づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。

ウ 学校行事

学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

③高等学校の活動

高等学校の活動は、①ホームルーム活動、②生徒会活動、③学校行事である。

各目標は、以下である。

ア ホームルーム活動

ホームルーム活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてホームルームや学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。

イ 生徒会活動

生徒会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。

ウ 学校行事

学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活や社会生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる

3. 各活動の内容

①小学校は、第1、2年と第3、4年、第5、6年と、学年ごとに内容が若干違うが、共通点を記すことにしたい。

ア 学級活動

学級を単位として、仲良く協力し、信頼し合って楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるとともに、日常の生活や学習に自主的に取り組もうとする態度の向上に資する活動を行うこと。

イ 児童会活動

学校の全自動をもって組織する児童会において、学校生活の充実と向上を図る活動を行うこと。児童会の計画や運営、異年齢集団による交流、学校行事への協力など。

ウ クラブ活動

学年や学級の所属を離れ、主として第4学年以上の同好の児童をもって組織するクラブにおいて、異年齢集団の交流を深め、共通の興味・関心を追求する活動を行うこと。クラブの計画や運営、クラブを楽しむ活動、クラブの成果の発表などである。

エ 学校行事

全校又は学年を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。

(1) 儀式的行、(2) 文化的行事、(3) 健康安全・体育的行事、(4) 遠足・集団宿泊の行事、(5) 勤労生産・奉仕的行事 がある。

②中学校

ア 学級活動

学級を単位として、学級や学校の生活の充実と向上、生徒が当面する諸課題への対応に資する活動を行う。

(1) 学級や学校の生活づくり

主に学級や学校における生活上の諸問題の解決や組織づくり、仕事の分担処理、多様な集団の生活の向上、となる。

(2) 適応と成長及び健康安全

思春期の不安や悩みとその解決、自己や個性の理解と尊重、社会の一員としての自覚と責任、男女の協力、心身ともに健康で安全は生活態度や習慣の形成などである。

(3) 学業と進路

学ぶことと働くことの意義の理解、自主的な学習態度の形成、勤労観、職業観の形成などである。

イ 生徒会活動

学校の全生徒をもって組織する生徒会において、学校生活の充実と向上を図る活動を行うこと。

(1) 生徒会の計画や運営 (2) 異年齢集団による交流 (3) 生徒の諸活動についての連絡調整 (4) 学校行事への協力 (5) ボランティア活動などの社会参加

各項目ごとの内容は、中学校と共通する点が多いため、中学校の項で記述する。

ウ 学校行事

全校又は学年を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。

(1) 儀式的行事

学校生活に有意義な変化をつけ、清らかな気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなる。

(2) 文化的行事

平素の学習活動の成果を発表し、意欲を向上させ、文化・芸術に親しむ。

(3) 健康安全・体育的行事

心身の健全は発達や健康の保持増進などに

についての理解を深める。運動に親しみ、責任感や連帯感の涵養、体力の向上に資する。

(4) 旅行・集団宿泊的行事

見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての体験を積む。

(5) 勤労生産・奉仕的行事

勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、職場体験などの職業や進路にかかわる啓発的な体験が得られるようにする。社会奉仕の精神を養う体験が得られる活動を行う。

③高等学校

ア ホームルーム活動

学校における生徒の基礎的な生活集団として編成したホームルームを単位として、ホームルームや学校の生活の充実と向上、生徒が当面する諸課題への対応に資する活動を行うこと。(1) ホームルームや学校の生活づくり (2) 適応と成長及び健康安全 (3) 学業と進路 などがある。

イ 生徒会活動

学校の全生徒をもって組織する生徒会において、学校生活の充実と向上を図る活動を行うこと、とされ、(1) 生徒会の計画や運営 (2) 異年齢集団による交流 (3) 生徒の諸活動についての連絡調整 (4) 学校行事への協力 (5) ボランティア活動などの社会参画などがある。

ウ 学校行事

全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。とされており、(1) 儀式的行事 (2) 文化的行事 (3) 健康安全・体育的行事

(4) 旅行・集団宿泊的行事 (5) 勤労生産・奉仕的行事

以上がある。

2章 指導の方法

指導の計画と内容の取り扱いについて、学習指導要領では以下のように述べられている。(小学校)

- ①特別活動の全体計画や各活動・学校行事の年間指導計画の作成に当たっては、学校の創意工夫を生かすとともに、学級や学校の実態や児童の発達の段階などを考慮し、児童による自主的、実践的な活動が助長されるようにすること。また、各教科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間などの指導との関連を図るとともに、家庭や地域の人々との連携、社会教育施設等の活用など工夫すること。
- ②〔学級活動〕などにおいて、児童が自ら現在及び将来の生き方を考えることができるよう工夫すること。
- ③〔クラブ活動〕については、学校や地域の実態等を考慮しつつ児童の興味・関心を踏まえて計画し実施できるようにすること。
- ④第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、特別活動の特質に応じて適切な指導をすること。

上述されているように、特別活動は他の教科との連携を図りながら効果的に行われるべきものであるが、とくに④の道徳教育との連携において、どのような実践が可能なのか、次章で検討したい。

3章 特別活動と道徳教育・学級づくり とのつながり

ここでは特に小学校、中学校の特別活動と平成28年から「特別の教科」になった道徳との関係についてみていきたい。

まずは、道徳の目標を確認したい。

学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこと、とされている。

内容として、主として自分自身に関すること、主として他の人とのかかわりに関すること、主として集団や社会とのかかわりに関すること、主として生命や自然、崇高なものとのかかわりに関すること、とされており、4つについての目標が掲げられている。

1. 主として自分自身に関すること

- ① 善悪の判断、自律、自由と責任
- ② 正直、誠実
- ③ 節度、節制
- ④ 個性の伸張
- ⑤ 希望と勇気、努力と強い意志
- ⑥ 真理の探究

2. 主として他の人とのかかわりに関すること

- ① 親切、思いやり
- ② 感謝
- ③ 礼儀
- ④ 友情、信頼
- ⑤ 相互理解、寛容

3. 主として集団や社会とのかかわりに関すること

- ① 規則の尊重
- ② 公正、公平、社会主義

- ③ 勤労、公共の精神
- ④ 家族愛、家庭生活の充実
- ⑤ 家族愛、家庭生活の充実
- ⑥ よりよい学校生活、集団生活の充実
- ⑦ 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
- ⑧ 国際理解、国際親善

4. 主として生命や自然、崇高なものとのかかわりに関すること

- ① 生命の尊さ
- ② 自然愛護
- ③ 感動、畏敬の念
- ④ よりよく生きる喜び

たとえば、特別活動での地域の清掃や独居老人への手助けは、上記の2にあたり、清掃やボランティアをしながら他の人とのかかわりについて学ぶことができる。北海道などの積雪の多い地域では、老人が除雪をするのは困難であるため、地域の中学生、高校生が除雪の手伝いをボランティアで行っており、これは特別活動と同時に道徳教育であるといえるだろう。

3の中で、「生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ」という内容がある。生命の大切さについて、道徳授業のテーマで有名なものにモラル・ジレンマがある。ハーバード大学の道徳論者コールバーグの理論である。道徳を問い詰めていけば、答えが出ない場合があり、それは特に生命にまつわる問題で顕著である、というものだ。

よく知られている例題に以下のものがある。

ヨーロッパで、一人の女性が非常に重い病氣、それも特殊なガンにかかり、今

にも死にそうでした。彼女の命が助かるかもしれないと医者が考えている薬が一つだけありました。それは、同じ町の薬屋が最近発見したある種の放射性物質でした。その薬は作るのに大変はお金がかかりました。しかし薬屋が製造に要した費用の十倍の値段をつけていました。彼は単価に200ドルの薬を2000ドルで売っていたのです。病人の夫のハインツは、お金を借りるためにあらゆる知人を訪ねて回りましたが、全部で半額の千ドルしか集めることができませんでした。ハインツは薬屋に、自分の妻が死にそうだとわけを話し、値段を安くしてくれるか、それとも支払い延期を認めてほしいと頼みました。しかし薬屋は、「だめだね。この薬は私が発見したんだ。私はこれで金儲けをするんだ」と言うのでした。そのためハインツは絶望し、妻のために薬を盗もうとその薬屋に押し入りました²⁾。

まず一つ目の質問は、ハインツは道徳的に正しいか？

それから、二つ目の質問は、「客観的で普遍的な正しい答はあるか」である。

授業方法としては、グループディスカッションなどで議論させ、自らの立場を明確にさせることが適切であろう。その過程において、児童生徒が戸惑い、なかなか答えを見つけない、見つからないというそのことに気づくことに、このモラルジレンマの価値はある。

コールバーグによれば、回答により道徳の発達とは三レベル六段階になっている³⁾。

I 慣習以前のレベル

「善い」「悪い」「正しい」「正しくない」といった個々の文化の中で意味づけられた規則や言葉に反応するが、これらの言葉の意味を、行為のもたらす物理的結果や、快・不快の程度（罰、報酬、好意のやりとり）によって考えたり、そのような規則や言葉を発する人物の物理的な力によって考える。

第一段階—罰と服従志向

行為の結果が、人間にとってどのような意味や価値をもとうとも、その行為がもたらす物理的結果によって、行為の善悪が決まる。罰の回避と力への絶対的服従が、ただそれだけで価値あることと考えられる。それは、罰や権威が支持する根本的な道徳秩序に対する尊重からではない。（後者の場合は第四段階）

第二段階—道具主義的相対主義者志向

正しい行為とは、自分自身の必要と、ときに他者の必要を満たすことに役立つ行為である。人間関係は、市場の取引関係に似たものと考えられる。公正、相互性、等しい分け前等の要素が存在するが、常に物理的な有用性の面から考えられる。相互性も「あなたが私の背中をかいてくれたら、私もあなたの背中をかいてあげる」式の問題であって、忠誠や感謝や正義の問題ではない。

II 慣習的レベル

個人の属する家族、集団、あるいは国の期待に添うことが、それだけで価値があると認識され、それがどのような明白な直接的結果をもたらすかは問われない。その態度は、個人的な期待や社会の秩序に一致するというだけでなく、社会の秩序に対する忠誠と、その

秩序を積極的に維持し、正当化し、かつその中に存在する個人や集団と一体になろうとする態度である。

第三段階—対人関係の調和あるいは「良い子」志向

善い行動とは、人を喜ばせ、人を助け、また人から承認される行動である。多数意見や「自然な」行動についての紋切り型のイメージに従うことが多い。行動は、しばしばその動機によって判断される。「彼は善意でやっている」ということが初めて需要になる。「良い子」であることによって承認を勝ちえる。

第四段階—「法と秩序」志向

権威、定められた規則、社会秩序の維持等への志向が見られる。正しい行動とは、自分の義務を果たし、権威を尊重し、既存の社会秩序を、秩序そのもののために維持することにある。

Ⅲ 慣習以後の自律的、原理的レベル

道徳的価値や道徳原理を、集団の権威や道徳原理を唱えている人間の権威から区別し、また個人が抱く集団との一体感からも区別して、なお妥当性をもち、適用されるようなものとして規定しようとする明確な努力が見られる。

第五段階—社会契約的道法主義志向

概してこの段階には、功利主義的なところがある。正しい行為は、一般的な個人の権利や、社会全体により批判的に吟味され、合意された基準によって規定される傾向がある。個人的価値や意見の相対性が明瞭に認識され、それに呼応して、合意に至るための手続き上

の規則が重視される。正しさは、憲法に基づいて民主的に合意されたもの以外は、個人的な「価値」や「意見」の問題とされる。その結果、「法の観点」が重視されるが、(第四段階の「法と秩序」によって、法を固定的に考えるのではなく)社会的効用を合理的に勘案することにより、法を変更する可能性が重視される。法の範囲外では、自由意志に基づく合意と契約が、人間を拘束する義務の要素となる。これは、アメリカ合衆国政府と憲法によって立つ「公約」道徳である。

第六段階—普遍的な倫理的原理志向

正しさは、論理的包括性、普遍性、一貫性に訴えて自ら洗濯した倫理的原理に一致する心の決定によって規定される。これらの原理は、抽象的かつ倫理的であり(黄金律、定言命法)、十戒のような具体的道徳律ではない。もともとこれらの原理は、人間の権利の相互性と平等性、一人ひとりの人間の尊厳性の尊重など、正義の普遍的諸原理である。

以上のような発達段階がある。そのため、生徒児童の指導は、この発達段階に沿って行われなければならない。しかし、発達段階調査の結果は、国によっても異なり、米国でも第三段階が主流を占めるという調査結果もある。モラルジレンマは永遠のテーマといえる。

また、トロッコのような例題もあるが、日本にはトロッコにはなじみが薄いため、電車に置き換えたい。

あなたは電車を運転していました。急にブレーキがきかなくなり、分かれ道で右か左にハンドルを切らなければなりません。右には1人います。左には3人いま

す。あなたはどちらに進みますか？

この例題の場合、全員が知らない人である場合について考えさせ、次に右の1人が親や配偶者など身内だった場合はどうか、についても考えさせる。

その結果、あるジレンマに突き当たり「正しい」答えが出ないこともある場合を知る。

このように生命についての議論を深めることは、特別活動の学級活動や生徒会活動において、他者を尊重し大切にするという根本的思想につながり、望ましい人間関係を築く礎となるものである。

学級経営は、学校活動を中心として行われなければならないが、1章で確認したとおり、学級活動の目標は「学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」とある⁴⁾。このような道徳教育は、いじめ、不登校の問題を扱う生徒指導にも生かすことが出来、それが結果として円滑な人間関係、学級経営につながる。

特にクラスづくりにおいて、生命は何物にも代替出来ず、世界に1つも無駄な命などない、という理解が深まることや、それぞれの個性を認め合う必要性を理解することで、学級で誰もいじめられるべきではない、という考えにつながるであろう。そのような考えが学級活動に生かされることで、よりよい生活づくりや諸問題を積極的に解決しようとする児童生徒一人ひとりの実践力につながっていく。

先輩後輩関係や勝敗によるトラブルが発生しやすいクラブ活動においても、そのような

道徳の指導が、勝敗だけが重要なのではなく、生命を大切にし、一人ひとりが一生懸命に努力し参加することの重要性に気づかせる糧となる。

部活動での失敗が、不登校の要因の一つにもなるため、クラブ活動での道徳教育を生かした指導が、不登校も防ぐことになり、ひいては円滑な学級経営につながるともいえるだろう。

また、児童会活動、生徒会活動においては、道徳教育において「白紙の答案」などの教材を用いて指導を充実させることが出来る。白紙の答案の概要は以下の通りである。

数学係である優子は、先生から、以前予告していたテストを明日することを皆に伝えてほしいと頼まれた。熱があつて体調が悪かった優子は、保健室に行き、皆にテストのことを伝えるのを忘れてしまった。翌日、先生がこれからテストだと伝えると皆は聞いていません、と言って驚いた。クラスの数名は、「教科係だけ事前にテストがあることを知って、用意しといたのではないか、ずるい」などと言っていた。優子は、テストの答案を白紙で提出した。翌日、先生は、責任を持たせてしまったことを優子に謝り、クラスの皆に優子の気持ちを話すように伝える⁵⁾。

これは役割と責任について考えさせる教材で、優子はどうすべきだったのか？白紙で提出した行為は正しいのか？それが責任を取ったことになるのか、などについてディスカッションや役割演技などを用いて深められる。この場合、設定はクラスであるが、児童会、

生徒会においてもそれぞれの担当の役割と責任があり、このような道徳の教材や授業は、児童会、生徒会活動に応用され得るものである。このように特別活動や道徳教育と深く結びつき、ひいては、不登校、いじめ問題対策などとも関わって、円滑な学級づくりに実践的に生かせるものであると考えられる。

世界思想社、1993年
田中智志、橋本美保監修、犬塚文雄編『特別活動論』
一藝社、2013年

注

- 1) 文部科学省『小・中・高等学校学習指導要領（特別活動編）』文部科学省、平成20-21年、文部科学省『小学校学習指導要領解説（特別活動編）』東洋館出版社、2008年、文部科学省『中学校学習指導要領解説（特別活動編）』ぎょうせい、2008年、文部科学省『高等学校学習指導要領解説（特別活動編）』海文堂出版、2009年。学習指導要領参考分については以下同様。
- 2) ローレンス・コールバーグ（岩佐信道訳）『道徳性の発達と道徳教育』麗澤大学出版会、1987年、20頁。
- 3) 同上、171-173頁から抜粋。
- 4) 小学校学習指導要領解説 特別活動編 32頁
- 5) 広島県<https://www.pref.hiroshima.lg.jp>

参考文献

- 文部科学省『小・中・高等学校学習指導要領（特別活動編）』2008-2009年
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説（特別活動編）』東洋館出版社、2008年
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説（特別活動編）』ぎょうせい、2008年
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説（特別活動編）』海文堂出版、2009年
- ローレンス・コールバーグ（岩佐信道訳）『道徳性の発達と道徳教育』麗澤大学出版会、1987年、20頁。
- 佐野安仁、吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』